

# そよ風便り

創刊号  
2010年秋号

医療法人 せせらぎ



札幌在宅クリニック

## そよ風

### 医療法人とクリニックの名前の由来について

名前をつける、というのは本当に難しいことですね。初めての子供の名前を考えた時もあるけれど悩みましたが、クリニックの名前はもつと悩みました。「名は体(たい)を表す」との言葉通り、名前は中身の象徴になります。札幌で在宅医療をやるので、「札幌在宅クリニック」までは比較的すんなりと決まりました。その後何を持ってきたらいいか。自宅での生活を支えるのが仕事ですから、「札幌在宅クリニック 我が家」なんてのは割といいのではないかと、いろいろ候補を考えていました。

ある時、居酒屋で家内と飲みながらクリニックの計画をいろいろと話し合っている内に、「ところで名前をどうする？」という話題になりました。いろいろな案が出ましたが、『「そよ風」なんてのはどう?』と家内が提案しました。家内は以前から密かにこの名前を考えていたよう

です。「そよ風!? 何だそれ?」と反射的に反対しかかりました。分の文章をふつと思いついて出しました。

### 林道を歩きながら

東京での忙しい生活を抜け出し、北の大地・北海道に移り住んだのは、昨年の春のことだった。町は人口一万五千人の小さな町で、都会のようにはこれといって遊ぶものもなく、休みの日には、家族そろって山や川などの自然に親しむことが多い。九月の、文字通り雲一つない秋晴れの一日、家族四人で近くの山に散策にでかけた。車で林道をどこまでも行くと右に折れる道があり、さらに少し行くと、ゲートで行き止まりになっていった。車をここに止めて、娘たちには運動靴をはかせ、私と妻は昼御飯のおにぎりやら、缶詰めやらがぎつしり詰まったリュックサックを背負った。林道は道幅3mぐらいの比較的よく整備された道で、両脇にはたらの芽やふきなどの山菜が、取る人もなく育ち放題大きくなっ



ている。この辺り帯は熊の生息地帯で、道にはところどころ糞がちらばっている。春先に行くと、熊がふきを食い散らかした跡をよく見かけた。初秋の日射しは結構強く、少し歩くとうっすらと汗ばむくらいだった。娘たちは、暖かな陽気といろいろな遊びができる小砂利の混ざった土の道がさぞかしうれしかったのだらう、私と妻の後になつたり、先になつたりしながら、はしやぎまわっていた。上の娘は、道端から細い木の棒を拾って、最近覚えたばかりのひらがなを道に書いては、私に見せてくれた。下の娘はときどき道にぺたんとすわりこんで、砂遊び

をしている。こんな具合だから、いつこうに道ははかどらない。きょうは、目当てがあつてきたのではないから、とのんびりと歩くことにした。私もリュックをおろして道端にどっこいしよとあぐらをかいた。その私の頬を、穏やかな風が時折なでている。うつつすらと汗ばんだ肌にも気持ちよさがよかった。すまして耳に沢のせせらぎがかすかに聞こえてくる。道を振り返ると、娘たちの楽しそうに遊ぶ姿が見える。何と平和な風景だろう。暖かな太陽の光、穏やかな風にそよぐ森の梢のかすかなざわめき、遠くに聞こえる沢のせせらぎ、妻、娘たち、そして、自分という存在も、全てのものがうまく調和しているように私には、感じられた。

昔、どこかでこんな経験をしたことがある。私はそんな気がして仕方がなかった。その時はどうしてもわからなかったが、ある時、ふとそれを思い出した。あれは、私が小学生の頃だったろうか。夏休みに母の実家に遊びにいった時のことである。お盆の墓参りのために帰省したのだと思うが、両親の実家のことをいながら呼んでいた子供の私に旅行のようなものだった。母の実家から歩いて三十分ぐらいのところ、雑貨店があった。母、